

福岡県を中心とする 不快感を表す形容語の用法

—— 大学生の〈ウザイ〉〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉 ——

山 県 浩*

1. はじめに

[1] 本稿は、沖縄県を除く九州 7 県及び山口県の大学・短期大学に在籍する学生に対して行ったアンケート調査のうち、不快感に関する 5 項目に見られる形容語 3 語について、その用法の実態を報告することを目的とするものである。

本稿などの依る調査は、不快感を表す形容語に関する九州 7 県及び山口県における細かな地域差を明らかにすることを目的に準備をした。そして、山県 (2012) は福岡県の 11 地域、山県 (2014a) は福岡県を除く九州 6 県・山口県の 29 地域について地域差を報告した。更に山県 (2014b) は異なる観点で福岡県の 7 地域や九州 7 県の主要都市に見られる地域差を報告した。

本稿は、山県 (2014b) において課題とした、特定の言い方がどのような用法を持ち、地域によってどのように用法が異なるかという、用法に関する問題を明らかにすることを第一の目的とする。

これは、結果的に、これまで報告してきた様々な地域差がどのような言い方のどのような用法の違いに基づくかという観点で捉え直すことになる。

[2] 山県 (2014b) では、不快感に関する 5 項目について、ある項目がどの

* 福岡大学人文学部教授

ような言い方によって専ら言い表されるか、また複数の項目がどのような言い方によってどのように共通して言い表されるか、その結果、対象5項目がどのように区分されるかに基づいて、対象とする諸地域の違いを示した。

例えば、回答率30%以上の安定した言い方が5項目でどのように使われるかを図式化すると、論末の図-1~4の如くである。即ち、ある項目は、ある言い方だけで表されることもあるが、複数の言い方で表され、またある言い方は別の項目でも使われることがある。

例えば、久留米市を中心とする筑後北部（図-1）の場合、**項目1；前髪掛かり**は、〈ジャマ（イ）〉〈ウザイ〉〈シャーシイ〉〈ウットーシイ〉が使われる。これに対して、**項目2；長雨続き**は、これらのうち〈ウザイ〉〈シャーシイ〉が使われ、**項目4；落ち着きのない子供**は、同じく〈ウットーシイ〉も使われるが、本項目だけで〈セカラシイ〉が使われる。**項目3；雨夜の出迎え**も、共通して〈シャーシイ〉が使われる一方、本項目独自に〈メンドイ〉が使われる。

山県（2014b）では、**項目5；疲労感**だけで〈キツイ〉〈ツカレタ〉〈ダルイ〉が使われることより、**項目1・2**で〈ウザイ〉、**項目1・4**で〈ウットーシイ〉、**項目1・2・3**で〈シャーシイ〉が共通して使われることを重視した。そして、この重なりによって5項目がどのように区分されるか、区分のあり方に基づいて地域差を考察した。

例えば、筑後北部の「**項目1・2・3・4 対 項目5**」という区分のあり方は、隣接する筑後南部（図-2）の「**項目1・2・4 対 項目3 対 項目5**」とどのような関連を有するのか、隣接しない佐賀市のあり方（図-4）と同一ながら、どのような差異があるのかなどを通じて、地域の遠近関係を考え、地域差を明らかにした。

[3] 本稿では、各地域の区分のあり方を定める、複数の項目で一定の回答率を有する〈ウザイ〉〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉に焦点を当てる。

即ち、図-1~4の4地域の区分のあり方は、例えば、〈シャーシイ〉が一定

の回答率で使われる否か、使われる場合、筑後北部の如く項目1・2・3で使われるか、佐賀東部の如く項目2だけで使われるかなど、重なりをなす言い方の使われ方を積み重ねたものである。

[31] 九州7県18地域を対象にした山県（2014b）では、次の7語が複数の項目で共通して使われる、即ち、項目の重なりを生む言い方であった。

〈ウザイ〉〈ウットーシイ〉〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉〈ダルイ〉
〈ヨダキイ〉〈ヤゼイ〉

しかし、山県（2014b）は地域差を明らかにすることが目的であった。このため、5項目の区分のあり方を最終的に定めるこれら7語の用法は、殆ど触れることがなかった。

本稿は、紙面の関係があるため、上記の言い方の内、福岡県で問題となる〈ウザイ〉〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉について、福岡県における、これらの用法を示した上で他県での用法について述べる。

基本的には、それぞれの言い方は、全体としてどのような用法の広がりを持つか、その中で中心的用法は何か、周辺の用法は何か、これらは地域によってどのように異なるかなどを考察、報告する。^{注(1)}

[32] 本稿などの依る調査は、九州・山口地域における不快感を表す形容語の地域差の実態を報告することを目的とした。

先行研究として重要な陣内（1990）の如く、特定の言い方の意味・用法を詳細に記述するための調査でない。不快感に関する5項目は、地域差を測るための一基準である。

また本調査は当該地域の〈ウザイ〉の実態を解明することが出発点であった。このため、5項目も意味・用法に偏りが存する。そこで、考察の前に3章で対象とする〈ウザイ〉〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉は、全体的にどのような意味・用法を持ち、その中で本稿で扱う用法がどのような位置にあるかを確認する。

従って、本稿は、〈ウザイ〉〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉がどのような用法を持ち、地域によってどのように用法が異なるかなど、これらの用法に関する問題を明らかにするとは言え、限定された枠組みの中での考察に留まる。このため、特定の言い方の、特定の用法を基準にして、山県（2012）・山県（2014a）や山県（2014b）で示した地域差を捉え直すことも目的の一つとなる。

2. 調査の概要

[1] 本稿の依る調査は、2007年10月から2008年4月にかけて行った。

調査は、九州7県及び山口県に所在する大学・短期大学16校の在学学生に対して行い、1,760名から回答を得た。これらのうち、一定の条件（小学校・中学校・高等学校の12年間当該地域で過ごした者など）を満たす1,514名を有効回答者として考察対象とした（詳細は、山県（2009a）・山県（2009b）・山県（2011・12）のいずれも2章参照）。

県内差を明らかにするため、平成の大合併以前の市郡に従って当該8県に49地域を設定した。ただ、最終的には回答者の存しない2地域（熊本県東部＝阿蘇地域、鹿児島県種子島・屋久島地域）を除く47地域が対象になった。

これら47地域のうち、本稿では、これまでの論考と同じく9名以上の回答者を有する九州7県の37地域を対象とする。

但し、福岡県で唯一回答者が9名未満となる糸島域も参考のため取り上げる。従って、本稿で言及する地域及びその回答者は、論末の別表Ⅰ～Ⅲの如き38地域である。^{注②}

なお、地域ごとの詳細なデータは山県（2012）の表Ⅰや山県（2014a）の表Ⅰ～Ⅲを参照のこと。

[2] 調査項目は、所定の質問文に対して18～27種の言い方を選択肢として示し、地域で使われる言い方の最も現れやすい下位場面（家族と話をするとき）で使う言い方すべてを回答（選択）する形式である（調査資料は、山県

(2011・12) に示した)。

本稿で扱う不快感に関する項目は、次の5種である。

項目1；前髪が目にはかかるときの気持ち（略称．前髪掛かり）

項目2；長雨が降り続いたときの気持ち（略称．長雨続き）

項目3；雨夜の出迎えのときの気持ち（略称．雨夜の出迎え）

項目4；落ち着きのない子供たちが気になるときの気持ち（略称．落ち着きのない子供）

項目5；働き過ぎによる疲労感（略称．疲労感）

これら5項目は、不快感の性格や原因など、即ち、用法によって、ある階層をなす（山県（2011・12）・注(12)や山県（2014b）2章[3]項参照）。

ただ、本調査は不快感を表す言い方の中でも〈ウザイ〉〈ウザッタイ〉の実態を明らかにすることを元始の課題とした。このため、自身の行動を伴わない感覚的・精神的な不快感が原因となる近接した項目（項目1・2・4）が多い。

また、調査票のあり方として、ある質問に対して様々な言い方を選択肢として示す場合、〈ウザイ〉は、上記の事情に依り、5項目すべてで選択肢に示した。しかし、〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉は、項目5を除く4項目で選択肢とした。勿論、「その他」の回答を準備して、選択肢にない言い方を自由記述で記してもらった。^{注(3)}

3. 形容語3語の意味・用法

[1] 本稿などの依る調査は、特定の言い方の意味・用法の記述を目的としたものではない。

本稿で用法を考察する枠組みとなる5項目は、本来、地域差を測るための基準である。そこで、考察の前に〈ウザイ〉〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉の意味・用法について、代表的な方言辞典や地域語資料などの記述を確認する（調査資料は、論末の【方言辞典・方言集】を参照のこと）。そして、当該5項目がど

のように位置するか検討する。

なお、調査資料における記述は、意味・用法の説明も見られるものの、対応する共通語形を示すだけのものが多い。それらも含め、すべて【 】内に簡潔に示し、便宜的に「意味」と称する。また見出し語として「うぜー」「しえからしい」「せからしか」などの言い方が立てられることもある。これらも一括して〈ウザイ〉〈セカラシイ〉と表記する。

[2] 〈ウザイ〉の意味・用法は、山県（2006）で略述した。その後、辞典等での扱いに変化が見られるため、重なるところも厭わず記す。

当時最も詳しい説明であった井上・鎌水（2002）は、次の如く述べる。

ウザイ；「気持ちが悪い、不快だ」。次々項ウザツタイの短音化。… p.24

ウゼー；「気持ちが悪い、不快だ」。ウザイから。… p.27

〈ウザツタイ〉は「気持ちが悪い、不快だ、めんどうくさい、うっとうしい。」(p.24) と記される。従って、〈ウザイ〉と〈ウザツタイ〉は【気持ちが悪い】【不快】で共通する一方、後者は【面倒臭い】【鬱陶しい】の分だけ意味が広い。

これを受けるように、当時の実態調査は、〈ウザツタイ〉という言い方を示して「面倒くさい・不快だ・嫌な感じだ」などの意味で使うかという質問形式が多い（井上・萩野（1984）・井上（1997）・真田（1998）など）。

刊行が2000～2006年の国語辞典6種では、〈ウザイ〉は立項されず、〈ウザツタイ〉の省略形・転訛形とされるだけで、説明は見られない。〈ウザツタイ〉は、【鬱陶しい】【煩わしい】【うるさい】などの意味が一般的で、【面倒臭い】は1種に限られる（山県（2006）・注（5）参照）。

[21] 近年の実態調査は、例えば、岸江他（2011）の場合、「『わずらわしい・面倒くさい』というのをどういいますか」「雨でズボンのすそがぬれてしまいました。この時、『気持ちが悪い・不快だ』というのをどういいますか」という質問で、〈ウザツタイ〉〈ウザイ〉などが選択肢として示される。

これに依ると、九州方言の分布状況は、次の如くである。

図 10 「わずらわしい・面倒くさい」；〈ウザイ〉が全域に見られるが、福岡県・大分県・鹿児島県は〈メンドクサイ〉の方が優勢である。

図 11 「気持ちが悪い・不快だ」；〈キモチワルイ〉が全域で優勢であり、〈ウザイ〉は各県で1・2地点ずつ散見される程度である。

〈ウザイ〉は図 10 の方が図 11 より広範に高密度で見られる。これは、図 10 で「わずらわしい・面倒くさい」という異なる共通語形を示して質問したためであろう。これらの共通語形でどのような不快感を想起したのか、どちらの言い方を念頭にして〈ウザイ〉と回答したのか、ユレの大きい質問形式である。一方、図 11 は、「ズボンの裾濡れ」という具体的な不快感の原因で問うているため、ユレの小さい、信頼性における分布が見られる。

[22] 近年の国語辞典では、〈ウザイ〉が立項されるようになった。しかし、まだ〈ウザッタイ〉を中心とした説明が主流である。

これらによると、〈ウザイ〉の中心的意味は、不快感のうち、【鬱陶しい】【煩わしい】で一定し、〈ウザッタイ〉で一括した辞典では【邪魔】【目障り】【面倒臭い】などが見られる。^{注(4)}

以上の如く、今日、〈ウザイ〉の中心的意味は、【鬱陶しい】【煩わしい】という抽象的な感覚・感情に限定して捉えることが一般的である。この点で、本稿の項目 2；長雨続き、更に項目 1；前髪掛かりや項目 4；落ち着きのない子供など、行動を伴わない自身の感覚や精神に基づく不快感に対応する。また【煩わしい】から派生した【面倒臭い】も周辺の意味として項目 3；雨夜の出迎えに対応する

[3] 〈シャーシイ〉は、地域によって性格が異なり、豊前・豊後北部は伝統的方言であるが、その他の地域、特に博多方言は新方言である。

[31] 『日本方言大辞典』では見出し「せわしー」の①項「うるさい。騒がしい。」の小見出し「しゃーしー」で大分県西国東郡・速見郡を示す。出典は、文

献番号 941 = 『豊後方言集』 1933 のみである。

但し、より古い土肥 (1975) [1902 年発行]には〈シャーシイ〉は見えず、同義の語として「セフシー ヤカマシクテウルサイ (宇佐郡) ウルサキ」「セセロシー 煩ハシ (速見郡) ウルサイ (大分郡) サワガシイ」などが示される。

今回参照した辞典・資料類では、他に松田 (1975) に「しゃあしい うるさい やかましい」が見られるだけである。北九州市の小倉地域の言い方を集めたもので、編者の年齢等から 20 世紀初め頃には使われていたと判断される。

[32] 博多方言では、陣内 (1990) の記述「ポスト世代 (=40 代前半以下の世代・山県注) の回答の中にはシロシイに代わってシャーシイという語が割合見受けられる。… ポスト世代のシャーシイの意味用法は広がっており、ピーク世代 (=40 代後半以上の世代・山県注) のシャーラシイが持つ意味 (=「うるさい」「こうるさい」・山県注) はもちろん、「うっとうしい」、「気持ちが悪い」、「やかかいだ」などピーク世代のシロシイに対応するように意味でも用いられている。」(p.116) が根拠となって、新方言として次の如き説明が見られる。

井上・鎌水 (2002) ; シャーシイ「うっとうしい、不快だ、面倒だ」。博多の若い人 ; 老年層のシャーラシイまたはシロシイ (雨で濡れて不快だ) から意味が変化した。… p.91

その他、次項〈セカラシイ〉との関係で、真田・友定 (2007) は、「せからしか[博多]」の項で「若い世代では、「せからしい」に代わり、また「しろしい」の意味も含んで、「せわしい」(忙しい) から変化した「しゃーしい、しゃーしか」が一般的になってきている。」(p.258)、中村 (2005) は、「福岡の共通方言」である「しえからしか」の項で「「せからしい」「しゃからしか」「しゃーしー」とも言います。」(p.37) などと述べる。

以上、新方言の〈シャーシイ〉は、伝統的方言の〈セカラシイ〉とほぼ同義

で、陣内（1990）以下に基づくと、【鬱陶しい】【うるさい】【面倒】【厄介】【気持ちが悪い】などの意味を有する。限られた資料の範囲であるが、豊前・豊後北部の伝統的方言と比べると、外界の具体的な刺激に原因する【うるさい】などは重なるものの、話者自身の感覚的・精神的な不快感となる【鬱陶しい】やしたくない嫌な気持ちである【面倒】などは新方言としての新しい意味である。

そこで、参照した辞典・資料類の範囲で考えると、項目4；**落ち着きのない子供**を基本にして、項目1；**前髪掛かり**・項目2；**長雨続き**や項目3；**雨夜の出迎え**が対応する。

[4]〈セカラシイ〉は、九州全域を中心にして西日本に分布する伝統的方言で、〈シャーシイ〉に比べると、分布域は圧倒的に広く、意味も多様である。

[41]『日本方言大辞典』は、見出し「せからしー」で、4項目の「意味」を設け、①項で九州以外に西日本の府県（大阪府・和歌山県・兵庫県・岡山県・山口県・香川県・愛媛県など）が示されるが、他3項目は九州のみである。

小見出しに示される変種は「せからし」だけに留め、以下、九州の分布を記す（他の小見出しとして、①項は「せがらしー」、②項は「せがらし」が対象になるが、分布域は変わらない）。

①せきたてられるようで气ぜわしい。忙しい。また、こせこせしている。久留米※127（＝久留米はまおき 1840～53）、肥後※131（＝菊地俗言考 1854）、福岡県 872（＝福岡県内方言集 1899）、久留米市 883（＝久留米市方言 1914）、長崎県北松浦郡 899（＝平戸郷土誌 1917）、熊本県 918（＝笑訳熊本方言字典 1938）、八代郡 921（＝熊本県方言音韻語法 1933）、宮崎県児湯郡 040（＝現地採録、または報告によるもの）、鹿児島県 962（＝鹿児島語法 1908）、種子島 981（＝屋久島民俗誌 1943）《せからし》鹿児島市 038（＝全国方言資料・NHK1966～67）、肝属郡 970（＝大隅肝属郡方言集 1942）…

②騒々しくていらいらする。子供などが騒がしい。うるさい。福岡県 872 (=福岡県内方言集 1899)、佐賀県 887 (=佐賀県方言辞典 1902)、長崎県 900 (=平戸しるべ 1916)・907 (=伊王島村郷土史 1950)、北松浦郡 899 (=平戸郷土誌 1917)、熊本県 918 (=笑訳熊本方言字典 1938)、下益城郡 930 (=肥後方言集 1938)、大分県 941 (=豊後方言集 1933~34)、宮崎県 東諸郡郡 040 (=現地採録、または報告によるもの)、西臼杵郡 947 (=日向 1933)、鹿児島県 961 (=鹿児島方言集 1906) 《せからし》薩摩※025 (=俚言集覧 1797 頃、増補 1899)、熊本県下益城郡 931 (=下益城郡誌 1922)、宮崎県 948 (=北日向方言圏紀行 1952)・954 (=国語資料 1932)・956 (=都城地方方言集輯 1931)、鹿児島県 961 (=鹿児島方言集 1906)・967 (=始良地方の研究 1935) …

③煩わしくて嫌だ。めんどくさい。久留米※127 (=久留米はまおき 1840~53)、福岡県 872 (=福岡県内方言集 1899)、佐賀県三養基郡 894 (=佐賀県三養基郡上峰村方言集 1935)、長崎県長崎市 906 (=長崎方言集覧 1925)、対馬 910 (=対馬島誌 1928) …

④恥ずかしい。きまりが悪い。長崎県対馬 910 (=対馬島誌 1928)・913 (=対馬南部方言集 1944)

九州における密度は、②項【騒がしい】【うるさい】が最も高く、①項【気ぜわしい】【忙しい】、③項【煩わしい】【面倒臭い】、④項【恥ずかしい】と続く。大まかな九州の分布は、②項は九州 7 県、①項は福岡県・長崎県・熊本県・宮崎県・鹿児島県の 5 県、③項は福岡県・佐賀県・長崎県の 3 県、④項は長崎県の対馬のみである。①項は、既述の如く西日本各地に見られるものの、九州での分布は限られる。

同じく全国規模の辞典である江端・加藤・本堂 (1998) で〈セカラシイ〉が見られるのは 2 項目で、【うるさい】の項は福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・宮崎県、【面倒】の項は福岡県・佐賀県・熊本県、また佐藤 (2009) では福岡

県・佐賀県・熊本県に〈セカラシイ〉が示され、3県とも【うるさい】が当てられ、更に福岡県は「他に「子どもなどが騒がしい」「気ぜわしい」「煩わしい」などの意も」(p.325)と注される。

平山他(1992) [分野 11・人間関係]の「うるさい【煩い】」の項目で〈セカラシイ〉が見られるのは、福岡市・熊本県八代郡・甕島である。これと重なるところの多い『日本のことばシリーズ』で〈セカラシイ〉を「Ⅲ. 方言基礎語彙」または「Ⅳ. 俚言」で示すのは(既刊分)、福岡県(うるさい)・佐賀県(面倒だ)・長崎県(うるさい・面倒臭い)である。

以上の如く、〈セカラシイ〉は、九州方言でも福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県を中心にして、主に聴覚的な不快感や煩瑣な状態に対する精神的な不快感を表す言い方として古くから使われていることが分かる。

従って、本稿の項目4；**落ち着きのない子供**を基本としつつ、項目3；**雨夜の出迎え**に対応する意味である。しかし、自己完結的で、感覚的・精神的な不快感である項目1・2に対応する意味が見られない一方、『日本方言大辞典』の①項【気ぜわしい】【忙しい】に関わる項目が本調査に欠けるなど、〈ウザイ〉〈シャーシイ〉に比べると、既存の辞典・資料類で知られる〈セカラシイ〉の実態と本稿の項目にはズレが存在する。

[42] 県単位で見ると、福岡県は、九州7県の中で〈セカラシイ〉の使用が盛んな県の一つである。しかし、全県的な事象でなく、県内差が存する。

中村(2005)は、「筑前の方言」「筑後の方言」「豊前の方言」と区別して〈セカラシイ〉を「福岡の共通方言」(=福岡県でよく使用される方言)とする。しかし、佐藤(2009)は、「西部・南部」に限定し、『福岡県内方言集』も、用例②如く福岡市以外は筑後地方の市郡を使用地域として示す。^{注(5)}

県内各地域の資料は、〈セカラシイ〉の意味として【うるさい】を共通して示す。ただ、筑後地方の資料は多彩で、内山・郷田(1973)は他に【面倒臭い】【せわしい】【こせこせした】などを掲げ、松石(1989)・松田(1991)も【面

倒臭い】を示す。

なお、『日本方言大辞典』で福岡県は①②③の3項目に見られる。しかし、多くは、久留米※127=『久留米はまおぎ』、福岡県 872=『福岡県内方言集』に依り、これら以外は、①項の久留米市 883=『久留米市方言 (写本)』1914 (未見) だけである。また本文を確認した前2者も、用例①②の如くで、①項「こせこせしている」や③項「めんどくさい」と明記している訳ではない。

①野崎教景 (1840~52 頃) 『久留米はまおぎ』補足 p.152

一 せからしい 多忙と煩厭との両義に用ふ、せはしいの転訛也。

②福岡県教育会本部編 (1975) 『福岡県内方言集』 [1899 年発行] p.190

セワシイ	繁劇	忙シキ	{ せからし(久)(井)(山)(浮)(瀧)(福)(朝) やぜない(筑)(朝)(糟)(嘉) }

※久=久留米市、井=三井郡、山=山門郡、浮=浮羽郡、瀧=三瀧郡

福=福岡市、朝=朝倉郡/筑=筑紫郡、糟=糟屋郡、嘉=嘉穂郡

[43] 福岡県以外は資料が限られ、20 世紀前半の古い資料で〈セカラシイ〉の
見られるのは、佐賀県・長崎県・熊本県のもので、大分県のものには見出せない。

記述を列举すると、佐賀県は、佐賀県教育会 (1902) 「ヤカマシイ。シンバイナ。」や佐賀県大観 (1933) 「五月蠅い」、長崎県は、北高来郡誌 (1919) 「煩シイ」、熊本県は、倉岡 (1938) 「騒々しい」や宇土郡誌 (1921) ・下益城郡誌 (1922) 「喧し」などである。いずれも『日本方言大辞典』で密度の高い②項【騒がしい】【うるさい】の類である。

大分県は、『日本方言大辞典』で②項のみ、それも大分県 941=『豊後方言集』1933 (未見) に基づく。より古い土肥 (1975) [1902 年発行]は、本章[31]項に示した如く同義の「セワシー」「セセロシー」を示すだけで、〈セカラシイ〉は見られない。

今回調査した唯一の鹿児島方言資料である橋口 (2004) は、「セカラシ」「セ

カラシカ」などの見出しで項目を複数立て、どれも【やかましい】【うるさい】と記すものの、1項目で「煩わしい」「せわしい」「気難しい」「忙しい」「しつこくていや」などと列挙する。

以上、福岡県以外の資料では、『日本方言大辞典』の4項目のうち、対馬だけの④項を除くと、①②項は複数の資料で確認できる。しかし、③項のうち【面倒臭い】は[41]項に示した江端・加藤・本堂（1998）や『日本のことばシリーズ』に記されるだけである（前者は佐賀県・熊本県、後者は佐賀県・長崎県）。

4. 調査結果・考察

[1]〈ウザイ〉〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉の用法は、アンケート結果を集計した別表Ⅰ～Ⅲに基づいて考察する。

その際、それぞれの回答率を次の如く扱い、論を進める（回答率は、ある地域の回答者全体に対して該当の言い方を回答した者の占める割合＝百分比・％で、論中、小数点以下一位まで示す）。この回答率の扱いは、山県（2012）3章[2]項で述べた原則と同様である。

30%以上の言い方は、《一定の回答率を持つ、安定した言い方》としてすべて同等とする。従って、ある地域で項目間の違いや同じ項目で地域の違いを問題とする場合を除き、その高低は問題にしない。

20%以上・30%未満の言い方は、《一定の回答率を持つ言い方》として基本となる用法を広く捉えるため、対象にする。しかし、その項目は、（ ）付きまたは「」付きの二次的なもので、30%以上の回答と区別する。従って、30%未満の項目は、回答率が最も高くても中心的用法としない。

そして、地域ごとに5項目の内、何項目で20%以上になるかによって、第Ⅰ類～第Ⅴ類に分類し、この5分類を総称とする。しかし、特定の地域の分類を示す場合、20%以上・30%未満の項目を区別するため、Ⅰ'類、Ⅲ''類など、この項目数に応じて「」を施す（6. 図・別表の説明も参照のこと）。

ただ、これら 3 語がすべての項目で 20% 以上にならない地域も存する。これはこれまでの論考で報告した用法以前の問題である。しかし、地域差に関わるため、重複するところがあるが、本稿でも問題とする。

以下、福岡県の 12 地域及び九州 6 県の 26 地域について、〈ウザイ〉〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉が 1 項目以上で基準を満たすか否か、満たす場合、複数の項目であるか否か、複数の項目の場合、どの項目が回答率 30% 以上で、最も高いかなどを検討する。これらを通して各形容語は、地域ごとにどのような用法を持つかなどを明らかにする。またこれらの実態を示した後、各章[3]項で 3 章に記した各種方言辞典や地域語資料などの記述と比較を行う。

41.〈ウザイ〉の用法

[1] 福岡県は、対象 12 地域のうち、京築域を除き、**項目 1・2** がともに 30% 以上となるなど、〈ウザイ〉は福岡県で全県的な事象である（別表一 I 参照）。

京築域も、**項目 1** は 55.6% で、低くなく、**項目 2** も 22.2% で基準を満たす。

項目 1 と **項目 2** は、京築域の如く、前者の方が後者より回答率が高く、全体で平均 10% 内外の差となる。例外は糟屋域・筑紫域で、4% 程度の差で **項目 2** の方が **項目 1** より回答率が高い。この点で、福岡県において〈ウザイ〉は、**項目 1**；**前髪掛かり**が中心的用法で、**項目 2**；**長雨続き**もそれに準ずる用法である。

項目 1・2 以外は、**項目 4** が糸島域・京築域・筑後南部を除く 9 地域で基準を満たす。具体的には、福岡市・宗像域・遠賀域・筑豊東部・筑豊西部の 5 地域で 30% 以上、北九州市・糟屋域・筑紫域・筑後北部の 4 地域で 20% 以上である。**項目 1・2** に比すと、全体的に回答率が低いため、**項目 4**；**落ち着いた子供**は、福岡県の〈ウザイ〉の周辺的用法である。

従って、福岡県では〈ウザイ〉は **項目 1・2・4** にわたる用法を持ち、**第Ⅲ類** を基本的な分類とする。

第Ⅱ類 となる 3 地域のうち、糸島域は回答者 5 名で参考扱い、京築域も回答

者は9名で、糸島域に次ぐ少なさである。また筑後南部で**項目4**の〈ウザイ〉は16.3%で、僅かに基準に達しない。

遠賀域は、**項目3**で〈ウザイ〉が20.0%であるため、**項目1・2・3・4**で基準を超え、福岡県唯一の**第Ⅳ類**となる。

[2] 福岡県以外の6県26地域における〈ウザイ〉は、基本的に福岡県での用法と同一である（別表—I参照）。

即ち、**項目1**は26地域すべてで30%以上、**項目2**も2地域（薩摩南部・薩摩北部）を除き、20%以上となる。また3地域（長崎南東部・熊本中部・大隅南部）を除き、**項目1**の方が**項目2**より回答率が高い。これら3地域のうち、熊本中部のみ約6%の差で**項目2**の方が高いだけで、後2地域は同一の回答率である。

九州全域においても〈ウザイ〉は**項目1**；前髪掛かりが中心的用法である。

ただ、**項目1・2**以外で福岡県との違いが存し、地域差が見られる。

[21] 佐賀県・長崎県は、**項目3**で回答率の高い地域が多く、周辺の用法として**項目3**と**項目4**が拮抗する。

従って、福岡県では遠賀域だけであった**第Ⅳ類**が佐賀県で3地域、長崎県で1地域見られる。

佐賀県は、佐賀市とその周辺の東部で**項目3・4**が20%台で拮抗するため、**Ⅳ'類**となる。北部は、**項目3**が20%台で、**項目4**は40.0%となるため、遠賀域と同じ**Ⅳ'類**である。

長崎県は、長崎市で、**項目1・2**に加え、**項目3**；雨夜の出迎えが33.3%、**項目4**が29.6%と基準を満たす。このため、佐賀北部と並んで、用法が最も広い**Ⅳ'類**となる。長崎市の如く**項目3**が30%以上となるのは、全38地域で長崎市以外に長崎南東部だけである。南東部は、**項目4**が20%未満であるため、**項目1・2・3**で〈ウザイ〉が30%以上となる**Ⅲ類**である。

ただ、県北半の中部・北部は、佐賀西部と同じく**第Ⅱ類**で**項目1・2**に限定

される。

以上、佐賀県大半・長崎県南半は、**項目 3**が重要な用法となるのが特徴で、両県 8 地域で**項目 3**が 20% 以上となるのは 5 地域も存する（**項目 4**で 20% 以上は 4 地域）。このため、当該地域の〈ウザイ〉は、九州各地域の中で用法が最も広く、**項目 1・2**が中心的用法、**項目 3・4**が周辺の用法である。

[22] 熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県は、福岡県より〈ウザイ〉の用法は狭く、**項目 1・2**を基本とするものの、**項目 4**の回答率が高くない。

従って、県庁所在地の都市を中心に**第Ⅲ類**が見られるが、**第Ⅳ類**は存さず、**第Ⅱ類**が 7 地域見られ、**第Ⅰ類**も鹿児島県に 1 地域（薩摩南部）存する。

例えば、**項目 4**が 30% 以上となるのは、4 県 18 地域中 1 地域（大分西部）に留まり、20% 以上・30% 未満は、9 地域である。更に**項目 2**が 20% 未満となる地域が鹿児島県に 2 地域（薩摩南部・薩摩北部）、20% 以上・30% 未満となる地域が 4 地域（大分市・大分中部・大分北部・大隅北部）も存する。

従って、県全体の傾向としてまとめると、熊本県・宮崎県は、回答率の差が小さいため、**項目 1・2**が中心的用法と準中心的用法であるが、大分県・鹿児島県は、**項目 1**と**項目 2**の回答率の違いが大きいため、**項目 1**が中心的用法で、**項目 2**は周辺の用法である。

[3] 東京由来の新方言として〈ウザイ〉は最近の国語辞典で【鬱陶しい】【煩わしい】という意味が一定して示される。

伸びて視界に入る前髪は、視覚的に鬱陶しく感じる原因になり、何日も降り続く雨は、精神的に鬱陶しく感じる原因となる。いずれも話者自身で完結する不快感ながら、九州各地域では**項目 1**の方が**項目 2**より一貫して回答率が高い。このことから、より具体的な不快感に基づく方が〈ウザイ〉の【鬱陶しさ】に相応しいようである。

他に【邪魔】【目障り】などの意味が国語辞典に記されることがある。いずれも**項目 1**で選択肢とした。ただ、〈メザワリ〉は、どの県でも 10% 未満であ

るが、〈ジャマ（イ）〉は、**図1～4**の如く〈ウザイ〉に匹敵する回答率である。この点から〈ウザイ〉は**項目1**において不快感の原因となる状態として【目障り】の方が【邪魔】より重なるところが多い。

なお、ある時期の実態調査や一部の国語辞典には【面倒臭い】という意味が示される。本稿では、**項目3**；**雨夜の出迎え**に対応し、佐賀県大半・長崎県南半で一定の回答が見られた。しかし、九州の〈ウザイ〉としては限定的で、地域性を持ち、【鬱陶しい】に対して周辺の意味に留まる。

なお、岸江他（2011）の**図10**「わずらしい・面倒くさい」では、**3章**[21]項で述べた如く佐賀県・長崎県は、熊本県・宮崎県と並んで、福岡県・大分県・鹿児島県より〈ウザイ〉が目立つ。

42.〈シャーシイ〉の用法

[1] 福岡県では、筑後南部を除く11地域すべてで**項目4**が20%以上となり、**落ち着きのない子供**が福岡県の〈シャーシイ〉の基本となる用法である。このとき、福岡市・筑豊西部・筑後北部の3地域は20%台で、他8地域は30%以上である（**別表一Ⅱ**参照）。

基準を満たす11地域のうち3地域は、**項目4**以外でも20%以上の項目が存する。このため、8地域の**第Ⅰ類**の他、1地域ずつ**第Ⅱ類**・**第Ⅲ類**・**第Ⅳ類**が見られる。

この場合、**Ⅱ'類**の筑紫域と**Ⅲ'類**の糸島域は、**項目4**の回答率が最も高く、基本的な用法は**第Ⅰ類**の8地域と同一である。しかし、**Ⅳ'類**の筑後北部は、**項目4**が僅かに30%を切り（29.7%）、他3項目は30%台で、**項目1**が回答率が最も高い（39.1%）。

即ち、筑後北部を除く諸地域は**項目4**；**落ち着きのない子供**が中心的用法である。しかし、筑後北部は**項目1**；**前髪掛かり**が中心的用法で、**項目2・3**は中間的用法、**項目4**は周辺の用法になる。

なお、同じ筑後地方ながら、筑後南部は4項目とも10%未満で、対照的である。^{注(6)}

[2] 福岡県以外で〈シャーシイ〉が基準に達し、対象となるのは、佐賀県の一部地域・大分県の全地域である。他4県は、どの地域、どの項目でも回答率が20%を超えることはない(別表一Ⅱ参照)。

佐賀県は東部・北部の2地域、大分県は5地域が対象となる。これら7地域で項目4が20%以上となる。この場合、基本は第Ⅰ類であるが、佐賀東部のみが他に項目1・2・3で基準を満たし、Ⅳ'類となる。

[21] 佐賀東部は、項目2が40.7%で最も高く、他3項目は、29.6%の項目1・4も存するが、すべて20%台である。

基準を満たす地域の大半と異なり、項目4以外の項目で回答率が最も高いことは、筑後北部と同傾向である。また、両地域は、鳥栖市・神崎市・三養基郡からなる地域と久留米市を中心とする地域で、県は異なるものの、地理的に隣接する。この隣接性が九州各地域で他に例のない〈シャーシイ〉の用法を共通して持つ背景である。^{注(7)}

このように両地域は項目4の回答率が最も高くない点で一致する。しかし、他の項目1~3の回答状況は、類似はするものの、完全に一致する訳ではない(例えば、最も高いのは、筑後北部は項目1、佐賀東部は項目2で近接する用法であるが、最も低いのは、筑後北部は項目4、佐賀東部は項目3など)。

佐賀北部は、項目4が20.0%で、辛うじて対象となるⅠ'類である。唐津市を中心とする地域として福岡市・糸島市と隣接することが、佐賀東部と違った形で佐賀県の中で特徴を持つのであろう。

[22] 大分県は、全5地域で項目4が基準を満たすが、北部・中部は40.0%以上でⅠ類、大分市・南部・西部は20%台でⅠ'類となる。

北部は58.3%と高率で、同じくⅠ類である北九州市・京築域との地理的な隣接性のためと考えられる。中部は北部と接する杵築市・速見郡だけでなく、

別府市も同様で、南接する大分市との間に違いが見られる。

〔3〕〈シャーシイ〉は、辞典・資料類で詳細な実態が記せなかった（3章〔3〕項参照）。

豊前・豊後北部の伝統的方言である一方、福岡市では新方言として〈セカラシイ〉と同義で使われる程度しか示せず、他の地域の詳細は不明であった。

『日本方言大辞典』に依ると、伝統的方言の〈シャーシイ〉は、【騒がしい】【うるさい】という意味で、大分県西国東郡・速見郡に限られ、他に豊前北部の1資料で確認できるだけであった。

このことは、本調査で大分県の北部・西部が基準を満たし、**項目4**が中心的用法であることと一致する（西国東郡は北部の一部、速見郡は中部の一部）。

また**項目4**は、子供たちの落ち着きのない動作に感じる不快感で、一義的には視覚的な【うるささ】【鬱陶しさ】であるが、そこに子供ゆえの【騒がしさ】も不快感の原因となる。

一方、博多方言では、新方言として【鬱陶しい】【面倒臭い】など、意味を拡大して、〈セカラシイ〉と同義であると記されていた。ただ、本調査では、福岡県の筑後北部を除く諸地域では、**項目4**に対応する【騒がしい】【うるさい】に留まる。勿論、筑紫域・糸島域では、**項目1**に対応する【鬱陶しい】なども周辺的なものとして認められる。

しかし、筑後北部・佐賀東部は、大分県の〈シャーシイ〉に比べると、用法が拡大している。特に筑後北部は、**項目1**；**前髪掛かり**が中心的用法、**項目3**；**雨夜の出迎え**がそれに準ずるものであることは、井上・鏑水（2002）の説明「シャーシイ うっとうしい、不快だ、面倒だ」（p.91）に合致する。ただ、その使用者は「博多の若い人」でなく、久留米市を中心とする若い人である。

43.〈セカラシイ〉の用法

〔1〕福岡県12地域のうち、筑前地方の一部と筑後地方の全6地域で基準を

満たす項目が見られる。一方、豊前地方とそれに接する筑前地方の全6地域では殆ど回答されない。

〈セカラシイ〉も〈シャーシイ〉と同じく項目4が基本となる用法である。しかし、〈シャーシイ〉に比べると、全体に回答率が低く、30%以上は筑後北部・筑後南部の2地域だけである。

他に福岡市・宗像域・筑紫域は、項目4だけが20%台でⅠ'類、参考の糸島域は、項目1・4がともに20.0%でⅡ''類となる。

一方、筑後北部は、項目1・2・3が20%台ながら、項目4が32.8%でⅣ'''類、筑後南部は、項目3だけが20%未満で、項目1は48.8%、項目2は39.5%、項目4は30.2%でⅢ類となる。

福岡県の場合、項目4；**落ち着きのない子供**は、他の項目に比べて回答率が高いものの、20%台の地域が殆どである。このため、項目4が30%以上で中心的用法となるのは、筑後北部だけである。

筑後南部は、回答率の差から**項目1；前髪かかり**が中心的用法で、**項目2**がそれに準じ、**項目4**は30%以上ながら、周辺的用法となる。このように筑後南部の〈セカラシイ〉は、福岡県の他地域が**項目4**を基本とする中、**項目3**以外の3項目にわたり、また**項目1**を中心的用法とする点で筑後北部の〈シャーシイ〉と同傾向を示す。

更に筑後南部は、〈セカラシイ〉とともに〈シカラシイ〉も類義的な形容語として一定の回答が見られる。〈シカラシイ〉には〈セカラシイ〉と分布地域の違いや使い分けが確認できる。^{注(8)}

[2] 福岡県以外の九州6県は、〈セカラシイ〉の回答状況によって、次の如く分類される。

【佐賀県 対 長崎県】対 [熊本県 対 宮崎県・鹿児島県] 対 大分県

左方ほど、全体的に回答率が高く、用法が広く、右方になるに従って、回答率が低く、用法が限定される。最右方の大分県は全5地域・全項目で〈セカラ

シイ〉が20%未満となる。大分県を除く5県では**項目4**；**落ち着きのない子供**が21地域中17地域で20%以上となり、福岡県と同じく基本となる用法である。

[21] 〈セカラシイ〉が佐賀県を特徴付けることは、これまで繰り返し述べ、山県（2014a）・**31章**では用法につき、詳しく報告した。

県内4地域は、北部を除き、**第Ⅳ類**で、全体的な回答率の点で[佐賀市・東部 対 西部 対 北部]と3区分される。

佐賀市・東部は、4項目ともほぼ30%以上で、**項目3**；**雨夜の出迎え**が特に高く（佐賀市56.7%・東部48.1%）、中心的用法である。一方、西部は、**項目2**；**長雨続き**だけが30%以上で、他3項目は20%を僅かに超えるだけである。北部は、**Ⅱ'類**で、**項目3**が20.0%の一方、**項目4**は46.7%と高い。九州全域で**項目4**の回答率が高いが、佐賀県は例外となるため、この北部の値は佐賀県4地域の中で最も高い。

佐賀北部は、〈シャーシイ〉の場合と同じく、県内の他地域と異なり、**項目4**を中心的用法とする。地理的に糸島域・福岡市と接するためであろう。

また**項目4**が中心的用法でない点で、佐賀市・東部と筑後南部の関連が問題になる。ただ、地理的には佐賀市と大川市・柳川市が接するだけで、〈シャーシイ〉の佐賀東部と筑後北部ほど隣接性は高くない。それを物語るかの如く、中心的用法が異なり、筑後南部で回答率が最も高いのは**項目1**；**前髪掛かり**である。これは、佐賀市・東部で**項目3**；**雨夜の出迎え**に継ぎ、**項目2**；**長雨続き**と同じ回答率である。また筑後南部では**項目3**が唯一20%を切る。〈シャーシイ〉での筑後北部と佐賀東部における違いに比べると、中心的用法が自身の行動に関わるか否かの**項目1**と**項目3**で異なるなど、用法差が大きい。

[22] 長崎県は、中部を除く3地域すべてで**項目4**が20%以上となる上、長崎市・南東部で**項目1**が20%を僅かに超える。

このため、長崎市・南東部が**第Ⅱ類**、北部が**第Ⅰ類**となる。ただ、隣接する

佐賀県に比べると、全体に回答率が低く、最も回答率の高いのは、南東部の項目4の31.8%である。

従って、南東部は、項目4が中心的用法で、項目1が周辺の用法となる。長崎市は、いずれも20%台ながら、南東部と同じく項目4の方がやや高い。北部は、項目1の回答が存さず、長崎市・南東部と異なり、項目4が基本となる用法である。これは、隣接する佐賀北部と同傾向である。

[23] 熊本県は、4地域とも項目4の回答率が30%後半から50%近くで、他3項目との差が大きい。

この点で福岡県・佐賀県・長崎県の〈セカラシイ〉と異なり、中心的用法が限定的で、明確である。

宮崎県・鹿児島県は、熊本県の実態を更に後退させたあり様で、筑前地方の諸地域と同じI'類である。即ち、両県で項目4が20%台となる地域が全9地域中4地域に留まる。具体的には、宮崎南部・西部と薩摩北部・大隅北部で、熊本県の中部・南部と県境を挟んで接する地域である。

なお、大分県が対象外となることは、福岡県で豊前地方とその周辺地域が対象外になったことと地理的な隣接性で説明できる。

[3] 〈セカラシイ〉に関して、九州各地域は、ほぼ4つに分けられる。

即ち、回答の存しない福岡県の豊前地方・大分県の諸地域、項目4を中心的用法とする筑後北部・佐賀北部・長崎南東部及び熊本県の全地域、項目1・2・3のいずれかを中心的用法とする筑後南部と佐賀市・佐賀東部・佐賀西部、そして回答率が20%台であるため、項目4が基本となる用法に留まる筑前地方の一部、長崎市・長崎北部、宮崎県・鹿児島県の諸地域である。

回答率は必ずしも高くないが、項目4を基本とする地域が多数を占めることは、『日本方言大辞典』の②項【騒がしい】【うるさい】が九州で最も密度が高く、7県で見られることと一致する。この点で若年層の調査であるが、伝統的方言である〈セカラシイ〉の基本的な部分は衰退しつつ、継承されている。

その一方で、福岡県の筑後地方の一部や佐賀県の大半は、用法が広い。これは『日本方言大辞典』の③項【煩わしい】【面倒臭い】が福岡県・佐賀県・長崎県を使用地域とすること、福岡県内各地の資料が【うるさい】を共通して示す上、筑後地方の資料は更に【面倒臭い】などを掲げることを反映する。

ただ、筑後南部は、**項目3**；**雨夜の出迎え**でなく、【うるさい】に対応する**項目1**；**前髪掛かり**が中心的用法である。注（8）で述べたが、**項目3**は〈シカラシイ〉の方が回答率が高い。また江端・加藤・本堂（1998）の【面倒】の項目は福岡県・佐賀県・熊本県を示すものの、本調査では熊本県に【面倒】の痕跡は見られない。

一方、佐賀市・佐賀東部は、**項目3**を中心的用法として4項目にわたって回答率が高く、これら2地域の〈セカラシイ〉が最も伝統的な用法を残す。また20%台の回答率を含めると、筑後地方・長崎県の諸地域には、この佐賀県両地域的な用法の広さの痕跡が伺える。

『日本方言大辞典』の①項【気ぜわしい】【忙しい】に対応する項目を本調査で扱っていないため、推測に留まるが、筑後地方や肥前地方（佐賀県・長崎県）には九州の他地域と異なる用法を持つ〈セカラシイ〉が分布していたと考えられる。

5. おわりに

[1] 不快感に関する5項目に見られる形容語のうち、複数の項目で一定の回答率を有し、九州各地域で問題となる〈ウザイ〉〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉は、どのような用法を持ち、地域によってどのように用法が異なるかを大学生を対象とするアンケート調査の結果に基づいて考察、報告した。

具体的には、各語について基準を満たす回答率となるのは、5項目のうち、いくつの項目か、それらの中で回答率の最も高い項目はいずれかなどを通して、それぞれの用法の広さ、中心的用法・周辺の用法について、福岡県12地域の

実態を示し、それを一つの目安にして九州 6 県 26 地域の実態を捉えた。

ただ、〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉は、用法以前の問題として、使用に関する地域差が存する。このため、〈ウザイ〉と〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉に分けて、[2]項と[3]項でまとめる。

またこれまでの論考で報告した地域差を捉え直すことも目的の一つであった。ただ、対象とする言い方が3語であるため、全面的な見直しでなく、〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉が特徴的な筑後地方・佐賀県東半の4地域について[4]項で略述する。

[2] 〈ウザイ〉は、九州7県で使用に関する地域差は見られない。各県・各地域とも項目によって回答率の違いは存するものの、何らかの形で本稿で基準とした20%以上の回答率を有する。

この場合、全38地域において**項目1；前髪掛かり**が回答率30%以上で、中心的用法である。このように**項目1**を基本とする点で各地域は共通する。しかし、その用法の広さが地域によって異なる。

[21] 基準とした福岡県は、**項目2；長雨続き**も1地域を除く11地域で30%以上で、**項目1**との回答率の差が小さい。

このため、福岡県では、**項目2**は準中心的用法である。いずれも話者自身で完結する視覚的・精神的な不快感である。

また3地域を除くと、全県的に**項目4；落ち着いた子供**が基準を満たす。ただ、**項目1・2**に比べると回答率が低く、20%台も存する。このため、**項目4**は、福岡県の周辺的用法である。

項目1は視覚的な【うるささ】を特徴とし、**項目4**は更に聴覚的な【うるささ】が加わる。ただ、**項目1・2・4**は、いずれも自身の行動が関係しない、受動的な不快感を原因とする点で共通する。

[22] 佐賀県・長崎県は、福岡県に比べて、〈ウザイ〉の用法が広く、周辺的用法として**項目3；雨夜の出迎え**が加わる地域が存する。

即ち、両県とも全地域で**項目 1**が中心的用法、**項目 2**が準中心的用法で、福岡県と同傾向である。しかし、周辺の用法に関して地域差が見られる。

項目 3・4が周辺の用法となるのは、佐賀市・佐賀東部・佐賀北部と長崎市である。また長崎南東部は**項目 3**だけで、**項目 4**は基準を満たさない。

一方で、両県とも県庁所在地の都市から遠方の地域（佐賀西部、長崎中部・長崎北部）は、〈ウザイ〉の用法が狭く、周辺の用法を有さない**項目 1・2**だけである。

[23] 熊本県・宮崎県は、福岡県と同傾向で、**項目 1**が中心的用法、**項目 2**が準中心的用法、**項目 4**が周辺の用法である。

ただ、**項目 4**の回答率が全体的に低いため、基準を満たさない地域が存する。熊本県は北部・南部、宮崎県は北部などで、佐賀県・長崎県と同じく県庁所在地の都市から離れた地域で用法が狭い。

[24] 大分県・鹿児島県は、**項目 4**の回答率の低さは熊本県・宮崎県以上である上、福岡県などで準中心的用法であった**項目 2**が基準を満たさないこともある。

項目 1が中心的用法、**項目 2**が準中心的用法となるのは、大分県・鹿児島県の10地域中4地域（大分南部・大分西部、鹿児島市・大隅南部）に過ぎない。他6地域は、大分市も含め、**項目 2**は、すべて30%未満で、**項目 4**と同じく周辺の用法である。

[25] 〈ウザイ〉は、使用に関する地域差が存しないため、地域差が小さい。用法も全地域**項目 1**；前髪掛かりを中心的用法にする点で本質的な違いはない。

結局、**項目 2・項目 4・項目 3**の順で地域によって用法が広がる点が九州における〈ウザイ〉の地域差である。このとき、県内差は問わず、県全体の傾向で示すと、7県は次の如く分けられる。

佐賀県・長崎県≫福岡県≫熊本県・宮崎県≫大分県・鹿児島県

左方の諸県ほど〈ウザイ〉の用法が広く、右方の諸県ほど用法が狭い。

また佐賀県・長崎県・熊本県・宮崎県で見られた如く、県庁所在地の都市やそれに接する地域ほど用法が広い。福岡県は明確でないが、福岡市は、Ⅲ類（項目1・2・4すべてが30%以上）で、他に同じ分類の地域が存するものの、それ以上の広さの地域に事情があるため（遠賀域は、Ⅳ'類ながら回答者が10名）、他4県の傾向に反するものではない。

[3] 〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉は、〈ウザイ〉と異なり、使用に関する地域差が存する。これは、用法以前の問題で、地域差を大きくする。

即ち、一定の回答を有する県・地域は、〈シャーシイ〉の場合、福岡県のほぼ全地域、佐賀県の一部、大分県全域、〈セカラシイ〉の場合、福岡県の筑前地域の一部と筑後地域、佐賀県全域、長崎県南半、熊本県全域、宮崎県の一部、鹿児島県の一部である。

県単位では、福岡県・佐賀県は、〈シャーシイ〉だけの地域も存するが、県単位では〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉両用県、長崎県・熊本県・宮崎県・鹿児島県は、県全域か一部地域かの違いはあるものの、〈セカラシイ〉専用県、大分県は、〈シャーシイ〉専用県である。

両者を混用する福岡県・佐賀県は、県内で使用の地域差に加え、用法差も問題となる。

九州全域で、上記の如く、使用に関する違いは大きい。ただ、使用される場合、用法差は小さく、〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉ともに項目4；**落ち着きのない子供**が基本となる用法である。

勿論、項目4以外の項目で回答率が20%以上となる地域も少なくない。しかし、対象となる地域すべてにおいて〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉は項目4で必ず20%以上となる。

ただ、全体的に回答率が低いため、項目4は必ずしも中心的用法とならない。また筑後地方や佐賀県では別の項目が中心的用法になる。

[31] 筑後地方を除く福岡県は、〈シャーシイ〉が一般的で、〈セカラシイ〉は筑前地方の一部で**項目 4**を中心に僅かに回答されるに留まる。

〈シャーシイ〉は、筑前地方・豊前地方のほぼすべての地域で**項目 4**が中心的用法で、参考とした糸島域を除くと、他に特記すべき用法はない。

このような状況は、博多方言の若い世代で〈シャーシイ〉は〈セカラシイ〉に代わって一般的になってきた新方言で、両者の用法は重なるとの報告を裏付けるものである。

しかし、筑後地方は、県内諸地域と異なるだけでなく、久留米市を中心とする北部と柳川市・大川市・筑後市・八女市・大牟田市などからなる南部で違いが存する。

北部は、新しい言い方である〈シャーシイ〉の方が全体的に回答率が高く、**項目 1**が中心的用法、**項目 2・3**が中間的用法、**項目 4**が周辺の用法である。一方、伝統的方言の〈セカラシイ〉は、**項目 4**が中心的用法で、相補的である（**図-1**参照）。ただ、**項目 1・2・3**も 20% 台の回答率を有するなど、全体的に両者の用法は重なる。

南部は、〈セカラシイ〉が全体的に回答率が高く、〈シャーシイ〉は全項目 10% 未満で、福岡県内で特異な位置にある。

〈セカラシイ〉は、**項目 1**が中心的用法、**項目 2**が中間的用法、**項目 4**が周辺の用法で、用法の面でも特徴を持つ。また**項目 3**では、〈シカラシイ〉も一定の回答が見られる（**図-2**参照）。

[32] 〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉に関して佐賀県は西部以外の 3 地域が問題となる。

例外となる西部は、**項目 1・項目 3・項目 4**で〈ヤグラシイ〉が基準を満たす（項目順に 47.8%・30.4%・43.5% のⅢ類）。〈セカラシイ〉は、〈ヤグラシイ〉が 13.0% に留まる**項目 2**において回答率 30.4% で基準を満たす。

一方、佐賀市は、〈シャーシイ〉は全項目 10% 未満である一方、〈セカラシ

イ) は全項目 40% 以上となる。両形式の関係は、筑後南部と同傾向である。しかし、佐賀市の方が用法が広く、筑後南部で唯一 20% 未満となる**項目 3**が 56.7% で最も高く、中心的用法である。その他、**項目 1・2・4**も 40% 前半の回答率で、中心的用法に準ずる (図-4 参照)。

東部も〈セカラシイ〉の用法は基本的に佐賀市と同一である。ただ、**項目 4**が 29.6% とやや低いため、**項目 3**が中心的用法、**項目 1・2**がそれに準ずる用法で、**項目 4**は周辺の用法である。^{注(9)}

ただ、東部は、佐賀市と異なり、〈シャーシイ〉が一定数回答される。特に**項目 2**は 40.7% と高く、中心的用法である。**項目 1・4**は、ともに 29.6% で周辺の用法になる (図-3 参照)。^{注(10)}

北部は、〈シャーシイ〉が**項目 4**で 20.0% となり、福岡県との関連が問題となる。〈セカラシイ〉も特徴的で、佐賀県の他地域と異なり、**項目 4**が 46.7% と高く、中心的用法である。他 3 項目は、**項目 3**が 20.0% で、県内の他 3 地域でほぼ 30% 以上となる**項目 1・2**はともに 13.3% に過ぎない。この点でも佐賀県内で特異な位置にある。

[33] 〈シャーシイ〉専用の大分県は、九州全体の傾向と同じく全 5 地域で**項目 4**が基本となる用法である。

各地域の中でも古くから〈シャーシイ〉が使われていたことの知られる北部・中部で回答率が特に高く、**項目 4**が中心的用法となる。

[34] 〈セカラシイ〉専用の長崎県・熊本県・宮崎県・鹿児島県は、長崎県と他 3 県に分けられる。

長崎県は、佐賀県との関連で**項目 4**以外に**項目 1**でも 20% 以上の回答率になることがある。しかし、基本は**項目 4**で、南東部で中心的用法となる。

熊本県・宮崎県・鹿児島県は、**項目 4**を基本として、他の 3 項目はすべて 10% 未満である。ただ、**項目 4**も回答率は高くなく、熊本県 4 地域で中心的用法となるだけである。

[4] 本稿などの依る調査は、不快感を表す形容語に関する九州7県及び山口県における細かな地域差を明らかにすることを目的に準備した。

そこで、山県（2012）では項目ごとに回答率の高低に基づいて福岡県の11地域、山県（2014a）では福岡県を除く九州6県及び山口県の29地域について県内差を報告した。また山県（2014b）では5項目の区分のあり方に基づいて福岡県の7地域や九州7県の主要都市に見られる地域差を報告した。

ただ、これらの報告も地域差に関する研究として十分でないところがある。山県（2012）・山県（2014a）は、県内の地域差を問題とするもので、異なる県で隣接する地域どうしは類似性があった場合に言及するだけであった。山県（2014b）は、地域差を考察するのが5項目の区分のあり方という、これまでと異なる観点だけで、福岡県内は山県（2012）の枠内、九州7県の主要都市も、北九州市と県庁所在地の7都市が対象であったため、県単体の報告である山県（2011・12）の枠内に留まった。

[41] 本稿は、形容語3語の用法を問題とするもので、これまでの如く地域差の実態を報告することを第一の目的とはしていない。

しかし、〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉が特徴的で、地理的に隣接する筑後北部・筑後南部及び佐賀市・佐賀東部について、用法差という観点によってこれまでの地域差の捉え方を見直す。

これは、この2語の使用だけでなく、用法でも同じく特徴的であるため、筑後両地域は、福岡県でなく、佐賀県東半と一体化して考える必要があると考えるためである。そして、このように一体化して捉えると、これまでの県単位の考察で見出せなかった関連が当該4地域に存することが知られ、それは同時に新たな地域差の一つとなる。

なお、対象とする筑後地方・佐賀県の諸地域について、これまでの報告では次の如く述べた。

(1) 山県 (2012)

回答率 30% 以上の安定した言い方を対象としながら、検定 (母比率の検定) を行ったため、有意差の見られる、回答率の低い言い方も視野に入れて、福岡県内の地域差を考察した。

その結果、項目 1・2・4 を中心に筑後北部・筑後南部の地域の固有性・独自性が際立つとまとめた。これは、筑後北部は〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉の多用、筑後南部は〈シカラシイ〉〈セカラシイ〉の多用、筑後南部は更に〈ウザイ〉〈ウットーシイ〉などの**共通語的形式**の回答率の低さのためである。

山県 (2011・12) で〈セカラシイ〉は佐賀県を特徴付ける言い方であることを示したものの、本稿は、その目的から「筑後地域と佐賀県など、隣接する他県や諸地域との関連は、別に稿を設ける」(1章[3]項)と記すに留まった。

(2) 山県 (2014a)

九州 6 県及び山口県につき、県ごとに地域差を示し、佐賀県は[西部 対 佐賀市・東部 対 北部]という地域差が見られるとまとめた。本稿でも述べた如く、佐賀市と東部は〈シャーシイ〉の使用で違いが見られるものの、〈セカラシイ〉の用法の広さで共通する。このため、より差の大きい西部・北部との区別のため、佐賀市と東部をまとめた。

福岡県の地域差を扱わなかったため、筑後地方との関連につき、触れることはなかった。

(3) 山県 (2014b)

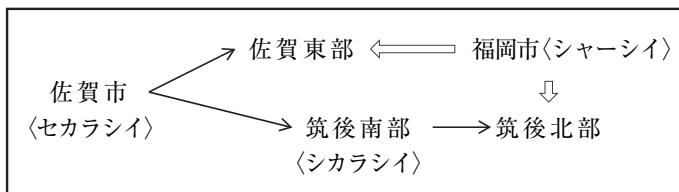
福岡県 7 地域の内、5 地域 (福岡市・糟屋域・筑紫域・北九州市・筑豊西部) は、5 項目の区分のあり方から、ある一貫した変化を想定して移行する同系統のあり方である、しかし、筑後北部・筑後南部は他の 5 地域とも、また相互にも関連付けがたい《系統的に別存在》と捉えた。

県外の諸都市（県庁所在地の5都市）と比較したのは、福岡県7地域の内、福岡市・北九州市であったため、佐賀市と筑後両地域の関連は論じなかった。しかし、注(11)などで触れ、佐賀県と筑後地方の関連について、最終的には〈セカラシイ〉〈シャーシイ〉の用法から「筑後両地域は、地域的な位置付けをする際には、佐賀県の周辺地域として考える必要がある」（4章[22]項）とまとめた。

異なる県で隣接する地域どうしは、他に福岡市・糸島域と佐賀北部、北九州市・京築域と大分北部、筑後北部と大分西部、筑後南部と熊本北部など、福岡県に限っても少なくない。しかし、上記の如く、筑後地方と佐賀県の関連は、これまで繰り返し言及し、本稿では当該地域に特徴的な言い方の用法を検討した。そこで、本稿の最後に、筑後地方・佐賀県東半を一体化して捉え、その中で地域差のあり様、具体的には該当諸地域の言語的な関連について述べる。

[42] 〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉の4項目における使用と用法に基づくと、筑後北部・筑後南部・佐賀市・佐賀東部は、まとまりのある一地域として捉えることができ、次の図の如く関連付けられる。

但し、これは山県（2014b）・図—Aの如く対象となる30%以上の言い方すべてを考慮した関係図ではない。〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉だけを基準にして関連付けたものである。また本稿などの依る調査の結果に基づくもので、歴史的な変遷を物語るものではない。



佐賀市は、伝統的方言〈セカラシイ〉が全項目にわたって高い回答率であるため（図—4の如く項目1・2・3・4がまとまる）、4地域の起点となる。

佐賀東部は、項目4で〈セカラシイ〉の回答率が低い一方（図-3の如く項目4が独立する）、新方言の〈シャーシイ〉が項目2を中心にして回答率が高いため、佐賀市より変化の進んだあり方である。

一方、佐賀東部以上に〈セカラシイ〉の衰退が著しいのが筑後両地域である。しかし、筑後南部は、項目3の回答率が低いだけで（図-2の如く項目3が独立する）、まだ項目1・2・4にわたり、〈シャーシイ〉が見られないため、佐賀東部とは別の系統として、佐賀市の次に置く。一方で、筑後南部には〈セカラシイ〉からの変化形〈シカラシイ〉が項目1に見られるなど、独自の変化が存する。

筑後北部は、筑後南部から移行したあり方と考える。〈セカラシイ〉の衰退が更に進み、ほぼ項目4に限定される。その一方で、佐賀東部と同じく新方言〈シャーシイ〉を（北方の福岡市方面から）受け入れ、〈セカラシイ〉に代わって項目1・2・3にわたる（図-1参照）。

その他、佐賀西部も佐賀市・東部と同系統と考えられる。しかし、本稿では言及する余裕がない。また佐賀北部は、福岡県で筑後両地域が特異であるように佐賀県でも別に考える必要がある。

[43] 筑後地方・佐賀県東半の4地域について、〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉の4項目の使用・用法に基づいて関連付けた。

ただ、これは、〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉のすべての意味・用法に基づくものでないなど、様々な制約の中での捉え方である。しかし、一方でこれまでの県単位の考察において、福岡県内で位置付けのできなかった筑後北部・筑後南部が隣接する佐賀市・佐賀東部とある形で関連付けられたことの意味は大きい。

また、筑後北部・筑後南部は、行政的には福岡県の一地域である。しかし、上記のことは、〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉の使用・用法を目安にすると、佐賀市から見て、佐賀東部の先にある「佐賀県の周辺地域」となることを意味す

る。佐賀市を起点にして筑後両地域が一体化して捉えられる訳で、新たな地域差の一つとなる。

[5] 〈ウザイ〉〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉の用法を問題としながら、項目ごとにその用法を説明することなく、更に意味との関連も触れなかった。

本稿も、これまでの論考と同じく、地域差に対する関心が改められなかった。このため、形容語 3 語の用法について論じながら、結果的に用法に基づいて地域差を捉えることになった。そして、意味・用法に入る前段階で紙面が尽きた。本稿で論じ得なかった問題は多い。今後別の調査結果も参照して、解決する予定である。

6. 図・別表の説明

図-1~4

不快感に関する 5 項目につき、回答率 30% 以上の言い方が各項目にどのように現れるか、福岡県の筑後北部・筑後南部と佐賀県の佐賀市・東部の 4 地域について図示したもの。特にある言い方が複数の項目に共通して見られる場合は、項目を重ねた。

なお、これらのうち、佐賀東部以外の 3 地域は、山県（2014b）の論末に図-16・17 及び図-2 として示した。

別表-Ⅰ~Ⅲ

〈ウザイ〉〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉の各項目における回答率を九州 7 県の 38 地域ごとに示したもの。

- ・各地域の 4 または 5 項目の中で、30% 以上で、回答率の最も高い項目の値に実下線、2 番目に高い項目の値に点下線を施す。
- ・「項目パターン」は、本稿で基準とした回答率 20% 以上の項目を示す。この場合、20% 以上・30% 未満の項目は、30% 以上の項目と区別する

ため、() を付し、全項目が基準に満たない場合は、「 ϕ 」を記す。

- ・「類」は、20%以上の項目の数1~4または5に応じてI~Vとする。但し、20%以上・30%未満の項目の数は、「'」で示す。従って、例えば、「IV'類」は、20%以上の項目が4、20%以上・30%未満の項目が2存することを意味する。但し、論中、幾つかの地域の類を問題にする際、煩雑になることを避けるため、20%以上・30%未満の項目数を区別せず、総称として第I類(含、I類・I'類)・第II類(含、II類・II'類・II''類)などの言い方をする。

【引用文献・参考文献】

- 井上史雄・荻野綱男(1984)『新しい日本語・資料図集』科研費報告書
- 井上史雄(1997)『社会方言学資料図集 一全国中学校言語使用調査(1993~1996)一』
東京外国語大学
- 岸江信介他(2011)「新方言全国地図(簡略版)」『大都市圏言語の影響による地域言語形成の研究』科研費基盤研究研究成果報告書
- 木部暢子他(1997)『日本のことばシリーズ 46. 鹿児島のことば』明治書院
- 九州方言学会(1991)『九州方言の基礎的研究・改訂版』風間書房
- 坂口 至他(1998)『日本のことばシリーズ 42. 長崎のことば』明治書院
- 真田信治(1998)『九州におけるネオ方言の実態』科研費報告書
- 陣内正敬(1990)「語の意味・用法のゆれと意味変化 一博多方言「しろしい」の場合一」『国語学』-160
- 陣内正敬他(1997)『日本のことばシリーズ 40. 福岡のことば』明治書院
- 花岡健吾(2002)「広島県大竹市方言における疲労感を表す形容語彙」『國文学攷』-175
- 藤田勝良他(2003)『日本のことばシリーズ 41. 佐賀のことば』明治書院
- 山県 浩(2006)「福岡県の若年層に見られる不快感を表す形容語 一<ウザイ>を中心に一」『福岡大学日本語日本文学』-16
- (2007)「九州・山口方言の若年層に見られる不快感を表す形容語」『福岡大学研究部論集・人文科学編』6-8

- (2009a) 「九州・山口地域を中心とする【救急絆創膏】を表す言い方—大学生の実態—」『福岡大学人文論叢』41-2
- (2009b) 「九州・山口8県における【絆創膏】を表す言い方 —大学生の実態—」『福岡大学人文論叢』41-3
- (2010) 「福岡県を中心とする【救急絆創膏】【絆創膏】を表す言い方—中年層の実態—」『福岡大学研究部論集・人文科学編』10-7
- (2011・12) 「九州・中国8県における不快感を表す形容語（上）（下）—大学生の実態—」『福岡大学人文論叢』43-3・43-4
- (2012) 「福岡県における不快感を表す形容語 —大学生の実態—」『福岡大学人文論叢』43-3
- (2014a) 「九州・山口7県における不快感を表す形容語の県内差—大学生の実態—」『福岡大学研究部論集・人文科学編』13-4
- (2014b) 「九州7県主要地域における不快感を表す形容語の枠組み —大学生の実態—」『福岡大学人文論叢』46-3

【方言辞典・方言集】

- 芦馬虎雄（1988）『郷土田川方言の面白さ —豊後浄瑠璃—』吟詠道無相豊雲流総本部
- 井上史雄・鏈水兼貴（2002）『辞典〈新しい日本語〉』東洋書林
- 内山一兄・郷田敏男（1973）『八女の方言』八女の方言研究会
- 江頭 光（1998）『博多ことば』葦書房
- 江端・加藤・本堂編（1998）『最新・ひと目でわかる・全国方言一覧辞典』学習研究社
- 木村・古瀬・田中編（2007）『近代日本方言資料集[郡誌編] 第8巻/九州・沖縄』港の人
- 全17郡誌中、関係する形容語の用例の採取できたのは、福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県の6資料＝三潞郡誌（1912）・佐賀県大観（1933）・北高来郡誌（1919）・宇土郡誌（1921）・下益城郡誌（1922）・球磨郡誌（1941）である。
- 九州方言研究会編（2009）『これが九州方言の底力！』大修館書店
- 倉岡幸吉（1975）『肥後方言集・再刊』国書刊行会 [1938年発行]
- 麴谷良三郎（1978）『裏門司地方の「方言集め」』私家版

- 佐賀県教育会編（1902）『佐賀県方言辞典』河内汲古堂
佐藤亮一編（2009）『都道府県別・全国方言辞典』三省堂
佐藤・木村・山田他編（1999）『近世方言辞書 第4輯 筑紫方言/久留米はまおき/菊
地俗言考/長崎歳時記/幡多方言』港の人
真田信治・友定賢治編（2007）『地方別方言語源辞典』東京堂出版
尚学図書編（1989）『日本方言大辞典 全3巻』小学館
土肥健之助編（1975）『大分県方言類集・再刊』国書刊行会〔1902年発行〕
中村萬里編（2005）『即訳！ ふくおか方言集』西日本新聞社
西 義助（1979）『ささぐりの方言』私家版
橋口 満（2004）『鹿児島方言大辞典』高城書房
原田章之進編（1993）『長崎県方言辞典』風間書房
原田種夫（1975）『博多方言・改訂版』文林堂
平山輝男他（1992）『現代日本語方言大辞典 第1巻』明治書院
福岡県教育会本部編（1975）『福岡県内方言集・再刊』国書刊行会〔1899年発行〕
松石安兵衛（1989）『柳川方言総めぐり』生涯学習振興財団
松田康夫（1991）『筑後方言辞典』久留米郷土研究会
松田康秀（1975）『豊前方言手帖・増訂版』九州孔版社
むかし話をする会編（1987）『三谷方言集』私家版
安岡慶造（1991）『朝倉ことば』咸美会

注

（1）山県（2014b）・注（1）で述べた如く、本稿も対象とする形容語の「用法」を問題とする。「意味」ではない。

これは、これまでの論考と同じく項目主体に論を進めるためである。

本稿などの依る調査は、ある意味を有する言い方がある場面（ある不快感を生じさせる状況）でどのように使われるかを問う質問形式を取り、それぞれの状況を項目1～5という「項目」に置き換えて論を進めた。

この質問は、どのような不快感の性格や原因によって想起される言い方であるかとい

う、各形容語の使われ方を問題にする。このような使われ方（用法）を生むのは、各語の持つ意味である。しかし、意味に立ち入ると論が煩瑣になるため、本稿では不快感の性格・原因レベルに留め、「用法」を問題とする。

(2) 各地域がどのような市町村からなるかは、必要に応じて説明する。しかし、詳細は、調査後の合併も含め、福岡県は山県（2012）・注(3)、福岡県以外の諸県は山県（2014a）・注(2)に示した。

(3) 「その他」で回答された言い方は、福岡県は山県（2012）の表-2、他の6県は山県（2014a）の表-a~fに地域・性ごとに示した。

〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉を選択肢として示さなかった項目5；疲労感では、佐賀東部の1名（女性）が〈セカラシイ〉を記した。選択肢として示すと、他に数名が選択したかもしれない。

なお、項目5の「その他」では、どの県も面倒系の言い方が多い。

(4) 2010年以降の国語辞典9種の記述は、次の如くである。うち*印の5種は、山県（2006）・注(5)で示した辞典と同一で、版が異なる。

山県（2006）で示した6種はすべて〈ウザイ〉を立項しないのに対し、今回は9種のうち3種が立項する。他6種は、〈ウザイ〉は〈ウザツタイ〉の省略形・転訛形として同義とする。これらは、【鬱陶しい】【煩わしい】を基本とし、【面倒臭い】が2種、その他【邪魔】【目障り】【不快で嫌】が個別に見られる。

一方、〈ウザイ〉を立項する3種（辞典①⑧⑨）における〈ウザツタイ〉との一致・不一致は、次の如くである。

- ①；【鬱陶しい】を共通する意味とする一方、〈ウザイ〉は【煩わしい】、〈ウザツタイ〉は【邪魔】を独自の意味とする。
- ⑧；【鬱陶しい】【煩わしい】を共通する意味とし、〈ウザツタイ〉は【不快】【邪魔】を独自の意味とする。
- ⑨；【うっとうしくて不快】【煩わしい】を共通する意味とする一方、〈ウザイ〉は【煩わしさ】の「扱いにくさのため」、〈ウザツタイ〉は【煩わしさ】の「細々しているため」と原因で区別する。

その他、参考とした『研究社日本語口語表現辞典』も〈ウザイ〉と〈ウザツタイ〉に違いを認め、前者に【鬱陶しい】【煩わしい】【うるさい】という固有の意味を認める。

以上、〈ウザイ〉は、〈ウザツタイ〉と意味的に重なるが、中心的意味は【鬱陶しい】

【煩わしい】である。一時期の調査でよく尋ねられた【面倒くさい】は周辺の意味の一つである。

*①『明鏡国語辞典・第2版』2010年12月・大修館書店

うざい(形) [俗]鬱陶しい。わずらわしい。「しつこく電話をかけてきてー」▽
「うざったい」の略から。

うざったい(形) [俗]目の前にちらついたり、気にかかったりして、邪魔に思うさま。鬱陶しい。「前に立ってる奴らがー」「一試験がある」

*②『岩波国語辞典・第7版新版』2011年11月・岩波書店

うざい ⇒ うざったい

うざったい(形) [俗]煩わしい。面倒臭い。また、邪魔な感じだ。

「電話がー」「一やつ」▽「うざい」はこれの略。

*③『新明解国語辞典・第7版』2012年1月・三省堂

うざったい(形) ①うっとうしくて目障りな様子だ。「前髪がー」②たまらなく不快な感じがして、そばに近寄るのも嫌な様子だ。「一中年男」[①②とも俗語的。また、「うざい」とも]

④『例解新国語辞典・第8版』2012年1月・三省堂

うざい[方言] ⇒ うざったい

うざったい[方言]気味が悪い。東京・神奈川などで言う。「うざってー」とも。

参考 東京都西部(多摩・八王子地区)で使われていた方言が、最近になって都心部で「うっとうしい・わずらわしい」の意味で使われるようになり、若者ことばとして全国に広まっている。その場合は、「うざい・うぜー」ともいう。

*⑤『学研現代新国語辞典・改訂第5版』2012年12月・学研教育出版

うざい(形)「うざったい」の略。

うざったい(形) [俗]うっとうしい。わずらわしい。うざい。

⑥『集英社国語辞典・第3版』2012年12月・集英社

うざい(形) [俗] ⇒ うざったい。

うざったい(形) [俗]うっとうしい。面倒くさい。煩わしい。うざい。「あれこれ言うので親がー」

⑦『旺文社国語辞典・第11版』2013年10月・旺文社

うざい(形) ← うざったい。

うざったい（形）〔俗語〕①わずらわしい。「—仕事」②うっとうしい。「髪が伸びて—」▽うざっこい。〔派生〕うざったがる。

*⑧『三省堂国語辞典・第7版』2014年1月・三省堂

うざい（形）〔俗〕わずらわしい。うっとうしい。〔「うざったい」から。一九九〇年代に全国的に広まったことば〕〔派生〕うざがる。

うざったい（形）①〔もと東京多摩地区の方言〕不快だ。わずらわしい。「—天気・—仕事」②〔俗〕うっとうしい。じゃまだ。「前髪が—・—やつ」▽うざっこい。うざい。〔派生〕うざったがる。うざったさ。

⑨『三省堂現代新国語辞典・第5版』2015年1月・三省堂

うざい（形）〔俗〕うっとうしくて不快だ。扱いにくくわずらわしい。〔語源〕「うざったい」の転。

うざったい（形）〔俗〕うっとうしくて不快だ。こまごまとしていてわずらわしい。「—ことを言う」

〔参考〕『研究社日本語口語表現辞典』2013年11月・研究社

うざい うっとうしい。煩わしい。邪魔だ。うるさい。

《解説》 その人がいると不快だ、気持ち悪い、邪魔だという意味の「うざったい」が短縮された形である。若い世代で使用され、仲間はずれにしたり、いじめたりする時に用いられることも多い。…

《会話例》

A：亮太、ちゃんと部屋、掃除しなさい。足の踏み場もないじゃない。

B：母さん、うぜーんだよ。俺の部屋なんだから、ほっといてくれよ。

(5) 豊前地方の薄さを示す例としては慎重に扱わねばならないが、裏門司地区の言葉を集めた麴谷（1978）は、福岡県の資料で唯一〈セカラシイ〉を記載しない（また〈シャーシイ〉も見られない）。しかし、不快感を表す形容語に関心がなく、〈シロシイ〉を示し、「雨降りの外出はしろしい。こじろしいは大儀な等の意。…」(p.58)と説明する。

一方、小倉南区の言葉を集めた松井（1975）・むかし話をする会（1987）は、ともに〈セカラシイ〉を示し、【うるさい】などと説明する。

(6) 筑後北部は、久留米市が64名中43名で、67.2%を占める。領域は、北は小郡市や朝倉市・朝倉町、東はうきは市、南は旧城島町など、広い。ただ、〈シャーシイ〉は

特定の市町に偏ることなく、領域全体に見られる。

筑後南部も、大川市・広川町から大牟田市まで多くの市町にわたり、北部に並ぶ領域を持つ。〈シャーシイ〉は、大牟田市・柳川市の他、久留米市に南接する広川町に散見される。

(7) 山県 (2014a)・注(5)で述べた如く、佐賀東部は、地理的に離れた、小城市と鳥栖市・神崎市・三養基郡からなる。これは、旧来の研究による各県の区画を踏まえながら、回答者の多い県庁所在地の都市を1地域として独立させた結果、地理的に離れた2地域をまとめることになった。

このため、〈シャーシイ〉は両地域で異なる。即ち、小城市 (5名) はどの項目でも〈シャーシイ〉は見られない。一方、鳥栖市 (7名)・神崎市 (7名)・三養基郡 (8名) はすべて、割合は異なるが、どの項目でも〈シャーシイ〉が一定数回答される。ちなみに、間の佐賀市は、別表一2の如く項目1・2は10%未満、項目3・4は0%である。

以上、〈シャーシイ〉は佐賀県でも筑後北部に接する地域に特徴的な言い方である。

なお、本稿では問題にならないが、同じ事情により宮崎南部は宮崎市に分断される2地域からなる (西都市・児湯郡・東諸県郡と日南市・串間市)。

(8) 筑後南部の〈シカラシイ〉の回答率は、次の如くで ([]内は、〈セカラシイ〉の回答率)、〈セカラシイ〉に伍する。項目1が中心的用法で、分類はⅣ''類となる。

項目1=41.9%[48.8%] 項目2=25.6%[39.5%] 項目3=23.3%[14.0%]

項目4=20.9%[30.2%]

〈シカラシイ〉は、筑後南部全域に見られるが、〈セカラシイ〉との関係で、次のように3地域に分かれる。

〈セカラシイ〉優位=筑後市・大川市

〈シカラシイ〉優位=みやま市

両形式が拮抗=柳川市・大牟田市・八女市・広川町

回答者の最も多い大牟田市 (14名) における、項目ごとの回答状況は、項目1・4は拮抗するが、項目2は〈セカラシイ〉が優位、項目3は〈シカラシイ〉が専用的である。

なお、筑後北部でも〈シカラシイ〉は一定数見られる (項目1から順に15.6%・12.5%・6.3%・10.9%)。ただ、北の小郡市・大刀洗町・筑前町で回答されず、うきは市・朝倉市も各1例に留まるなど、久留米市を中心とする。このため、久留米市では〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉〈シカラシイ〉が混在する。

なお、〈シカラシイ〉は、『日本方言大辞典』で見出し「せからしー」の②項【騒がしい】【うるさい】の小見出し「しからしー」で熊本県・鹿児島県の言い方とされる（熊本県八代郡 933、芦北郡 935、鹿児島県喜界島 983）。

その他、各種方言辞典や地域語資料には見出しがたく、現時点では次の一例を確認しているだけである。

三潞郡誌（1912）

シカラシイ（横溝）・セカラシイ（田口）（榎津）（横溝） 忙しい。うるさい。

横溝は三潞郡大木町の西部、田口・榎津は大川市中心部に位置する。

（9）注（7）において、〈シャーシイ〉の使用につき、佐賀東部は、小城市と鳥栖市・神埼市・三養基郡で違いがあることを述べた。〈セカラシイ〉でも違いが若干見られる。即ち、鳥栖市・神埼市・三養基郡で〈セカラシイ〉は幅広く見られるが、小城市は回答者5名中1名が**項目3・4**で回答するだけである。

一方、佐賀西部に特徴的な〈ヤグラシイ〉は、小城市の2名（**項目1・2・3**）と神埼市の4名（全項目）で回答され、鳥栖市・三養基郡には見られない。

『日本方言大辞典』で見出し「ややくろしー」で示される〈ヤグラシイ〉の他、〈ヤゼラシイ〉〈ヤゼロシイ〉などのヤ系の言い方は、佐賀西部以外に長崎県・熊本県・鹿児島県など広範に見られ、**項目1・2・3・4**にわたる（山県（2014a）・別表など参照）。また長崎県では新方言〈ヤゼイ〉が生まれている。また古くは『福岡県内方言集』で「やぜない」が筑前地方の言い方とされる（3章[42]項・用例②）。

本稿では、ヤ系の言い方は、変種が多様で、回答率が低いため、対象としなかった。しかし、〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉と用法が重なり、これらより古い層の言い方と考えられる。今後、別の世代の調査が必要がある。

（10）佐賀東部の**項目2**は、〈シャーシイ〉と〈セカラシイ〉が40%前後の回答率で拮抗する（40.7% 対 37.0%）。ニュアンスなど、微妙な違いは面接調査によって明らかにしなければならない。

本稿の限りで違いを考えるため、詳細な回答状況を示すと、次の如くである。

鳥栖市・神埼市・三養基郡の回答者（22名）で、〈シャーシイ〉〈セカラシイ〉いづれか、または両方を回答する者14名の内訳は、〈シャーシイ〉のみ回答は4名、〈セカラシイ〉のみ回答は3名、両方回答は7名である。

両者は、中心的用法が**項目2**と**項目3**で異なるため、同義ではない。しかし、この回

答状況は、**項目 2**の如き長雨が何日も続いて感じる鬱陶しさを大学生が直感的に捉えた場合、〈シャーシイ〉と〈セカラシイ〉は同じように回答されるくらい重なるところの多い言い方であることを示す。

【最終稿 2015 年 12 月 12 日】

図-1 筑後北部

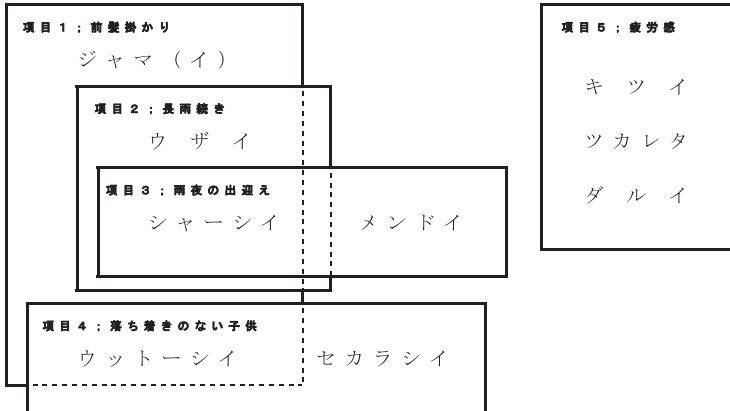


図-2 筑後南部

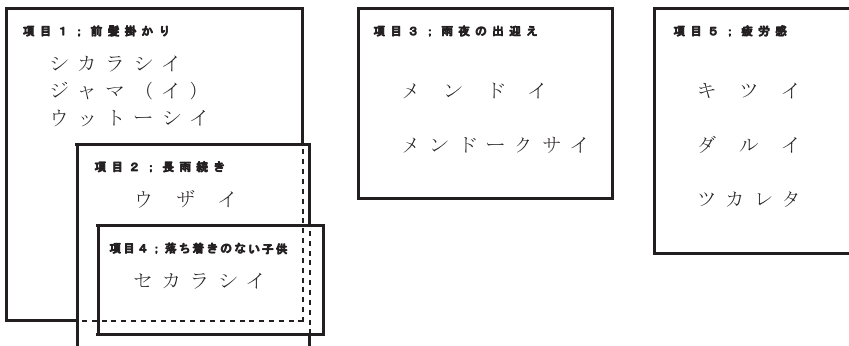


図-3 佐賀東部

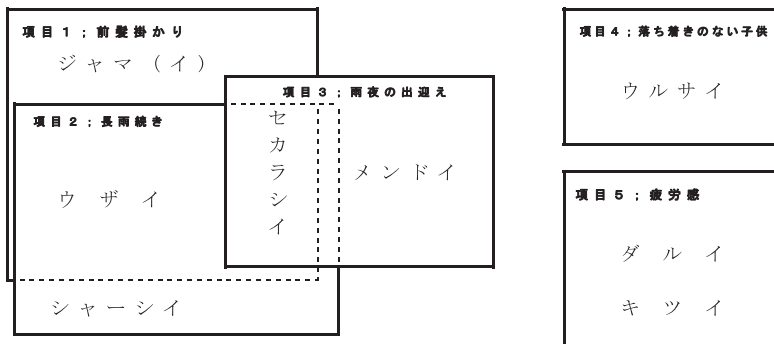
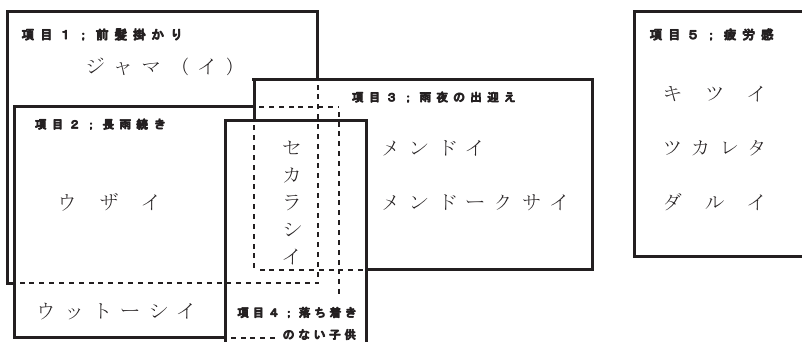


図-4 佐賀市



別表－Ⅰ ウザイ

No	県	地域	回答者数	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目パターン	類
1	福岡	福岡市	130	58.3	50.4	15.8	31.7	3.6	1・2・4	Ⅲ
2	福岡	宗像域	10	70.0	60.0	10.0	30.0	0.0	1・2・4	Ⅲ
3	福岡	糟屋域	31	54.8	58.1	12.9	22.6	0.0	1・2・(4)	Ⅲ'
4	福岡	筑紫域	67	47.8	49.3	14.9	23.9	6.0	1・2・(4)	Ⅲ'
5	福岡	糸島域*	5	80.0	40.0	0.0	0.0	0.0	1・2	Ⅱ
6	福岡	北九州市	66	51.5	40.9	9.1	22.7	6.1	1・2・(4)	Ⅲ'
7	福岡	遠賀域	10	70.0	60.0	20.0	50.0	0.0	1・2・(3)・4	Ⅳ'
8	福岡	京築域	9	55.6	22.2	0.0	0.0	0.0	1・(2)	Ⅱ'
9	福岡	筑豊東部	11	54.5	36.4	9.1	36.4	0.0	1・2・4	Ⅲ
10	福岡	筑豊西部	29	55.2	48.3	17.2	31.0	3.4	1・2・4	Ⅲ
11	福岡	筑後北部	64	56.3	42.2	15.6	25.0	7.8	1・2・(4)	Ⅲ'
12	福岡	筑後南部	43	32.6	30.2	7.0	16.3	4.7	1・2	Ⅱ
13	佐賀	佐賀市	30	53.3	40.0	23.3	26.7	13.3	1・2・(3)・(4)	Ⅳ''
14	佐賀	東部	27	55.6	48.1	25.9	22.2	0.0	1・2・(3)・(4)	Ⅳ''
15	佐賀	西部	23	52.2	39.1	8.7	4.3	0.0	1・2	Ⅱ
16	佐賀	北部	15	73.3	66.7	20.0	40.0	6.7	1・2・(3)・4	Ⅳ'
17	長崎	長崎市	54	57.4	48.1	33.3	29.6	13.0	1・2・3・(4)	Ⅳ'
18	長崎	中部	36	41.7	25.0	13.9	16.7	0.0	1・(2)	Ⅱ'
19	長崎	南東部	22	72.7	72.7	31.8	13.6	13.6	1・2・3	Ⅲ
20	長崎	北部	22	59.1	36.4	4.5	13.6	0.0	1・2	Ⅱ
21	熊本	熊本市	47	57.4	34.0	4.3	23.4	0.0	1・2・(4)	Ⅲ'
22	熊本	北部	34	41.2	35.3	17.6	17.6	8.8	1・2	Ⅱ
23	熊本	中部	16	56.3	62.5	12.5	25.0	0.0	1・2・(4)	Ⅲ'
24	熊本	南部	21	57.1	33.3	14.3	9.5	0.0	1・2	Ⅱ
25	大分	大分市	61	39.3	23.0	3.3	24.6	0.0	1・(2)・(4)	Ⅲ''
26	大分	中部	41	34.1	24.4	2.4	14.6	2.4	1・(2)	Ⅱ'
27	大分	南部	20	35.0	30.0	10.0	15.0	0.0	1・2	Ⅱ
28	大分	北部	24	50.0	29.2	0.0	12.5	0.0	1・(2)	Ⅱ'
29	大分	西部	9	66.7	55.6	11.0	44.4	0.0	1・2・4	Ⅲ
30	宮崎	宮崎市	26	38.5	34.6	7.7	23.1	0.0	1・2・(4)	Ⅲ'
31	宮崎	北部	14	50.0	35.7	0.0	14.3	0.0	1・2	Ⅱ
32	宮崎	南部	9	66.7	33.3	0.0	22.2	0.0	1・2・(4)	Ⅲ'
33	宮崎	西部	13	61.5	46.2	0.0	23.1	0.0	1・2・(4)	Ⅲ'
34	鹿児島	鹿児島市	82	43.9	31.7	6.1	26.8	3.7	1・2・(4)	Ⅲ'
35	鹿児島	薩摩南部	28	39.3	17.9	3.6	17.9	0.0	1	Ⅰ
36	鹿児島	薩摩北部	23	52.2	17.4	8.7	21.7	0.0	1・(4)	Ⅱ'
37	鹿児島	大隅北部	17	64.7	29.4	0.0	29.4	5.9	1・(2)・(4)	Ⅲ''
38	鹿児島	大隅南部	19	42.1	42.1	0.0	21.1	0.0	1・2・(4)	Ⅲ'
平均値				53.9	40.3	10.4	22.2	2.6		
標準偏差				11.5	13.5	8.8	10.5	4.1		

別表一Ⅱ シャーシイ

No	県	地域	回答者数	項目1	項目2	項目3	項目4	項目パターン	類
1	福岡	福岡市	130	9.4	8.6	2.2	24.5	(4)	I'
2	福岡	宗像域	10	0.0	0.0	0.0	<u>30.0</u>	4	I
3	福岡	糟屋域	31	16.1	6.5	9.7	<u>32.3</u>	4	I
4	福岡	筑紫域	67	23.9	17.9	4.5	<u>41.8</u>	(1)・4	Ⅱ'
5	福岡	糸島域*	5	40.0	20.0	0.0	<u>60.0</u>	1・(2)・4	Ⅲ'
6	福岡	北九州市	66	4.5	1.5	4.5	<u>30.3</u>	4	I
7	福岡	遠賀域	10	0.0	0.0	10.0	<u>60.0</u>	4	I
8	福岡	京築域	9	11.1	0.0	11.1	<u>44.4</u>	4	I
9	福岡	筑豊東部	11	9.1	0.0	9.1	<u>63.6</u>	4	I
10	福岡	筑豊西部	29	17.2	3.4	13.8	20.7	(4)	I'
11	福岡	筑後北部	64	<u>39.1</u>	<u>32.8</u>	<u>34.4</u>	29.7	1・2・3・(4)	Ⅳ'
12	福岡	筑後南部	43	9.3	7.0	0.0	2.3	φ	φ
13	佐賀	佐賀市	30	6.7	3.3	0.0	0.0	φ	φ
14	佐賀	東 部	27	29.6	<u>40.7</u>	22.2	29.6	(1)・2・(3)・(4)	Ⅳ'''
15	佐賀	西 部	23	0.0	0.0	0.0	0.0	φ	φ
16	佐賀	北 部	15	6.7	0.0	6.7	20.0	(4)	I'
17	長崎	長崎市	54	1.9	0.0	1.9	1.9	φ	φ
18	長崎	中 部	36	0.0	0.0	0.0	0.0	φ	φ
19	長崎	南東部	22	0.0	0.0	0.0	0.0	φ	φ
20	長崎	北 部	22	0.0	0.0	0.0	0.0	φ	φ
21	熊本	熊本市	47	0.0	0.0	0.0	0.0	φ	φ
22	熊本	北 部	34	0.0	0.0	0.0	2.9	φ	φ
23	熊本	中 部	16	0.0	0.0	0.0	0.0	φ	φ
24	熊本	南 部	21	4.8	0.0	0.0	4.8	φ	φ
25	大分	大分市	61	1.6	1.6	1.6	29.5	(4)	Ⅳ'
26	大分	中 部	41	0.0	0.0	0.0	<u>43.9</u>	4	Ⅳ
27	大分	南 部	20	5.0	0.0	0.0	25.0	(4)	Ⅳ'
28	大分	北 部	24	12.5	16.7	12.5	<u>58.3</u>	4	Ⅳ
29	大分	西 部	9	0.0	0.0	0.0	22.2	(4)	Ⅳ'
30	宮崎	宮崎市	26	0.0	0.0	0.0	0.0	φ	φ
31	宮崎	北 部	14	0.0	0.0	0.0	14.3	φ	φ
32	宮崎	南 部	9	0.0	0.0	0.0	0.0	φ	φ
33	宮崎	西 部	13	0.0	0.0	0.0	0.0	φ	φ
34	鹿児島	鹿児島市	82	1.2	0.0	0.0	1.2	φ	φ
35	鹿児島	薩摩南部	28	0.0	0.0	0.0	0.0	φ	φ
36	鹿児島	薩摩北部	23	0.0	0.0	0.0	0.0	φ	φ
37	鹿児島	大隅北部	17	0.0	0.0	0.0	0.0	φ	φ
38	鹿児島	大隅南部	19	0.0	0.0	0.0	0.0	φ	φ
平均値				6.6	4.2	3.8	18.2		
標準偏差				10.5	9.2	7.2	20.5		

別表一Ⅲ セカラシイ

No	県	地 域	回答者数	項目1	項目2	項目3	項目4	項目パターン	類
1	福岡	福岡市	130	2.9	4.3	2.9	20.0	(4)	I'
2	福岡	宗像域	10	0.0	0.0	0.0	20.0	(4)	I'
3	福岡	糟屋域	31	6.5	3.2	6.5	16.1	φ	φ
4	福岡	筑紫域	67	13.4	4.5	4.5	25.4	(4)	I'
5	福岡	糸島域*	5	20.0	0.0	0.0	20.0	(1)・(4)	II'
6	福岡	北九州市	66	3.0	1.5	0.0	4.5	φ	φ
7	福岡	遠賀域	10	0.0	0.0	0.0	10.0	φ	φ
8	福岡	京築域	9	0.0	0.0	0.0	0.0	φ	φ
9	福岡	筑豊東部	11	9.1	0.0	9.1	9.1	φ	φ
10	福岡	筑豊西部	29	3.4	0.0	3.4	6.9	φ	φ
11	福岡	筑後北部	64	26.6	21.9	26.6	32.8	(1)・(2)・(3)・4	IV'''
12	福岡	筑後南部	43	48.8	39.5	14.0	30.2	1・2・4	III
13	佐賀	佐賀市	30	43.3	43.3	56.7	40.0	1・2・3・4	IV
14	佐賀	東 部	27	37.0	37.0	48.1	29.6	1・2・3・(4)	IV'
15	佐賀	西 部	23	21.7	30.4	21.7	21.7	(1)・2・(3)・(4)	IV'''
16	佐賀	北 部	15	13.3	13.3	20.0	46.7	(3)・4	II'
17	長崎	長崎市	54	20.4	9.3	14.8	25.9	(1)・(4)	II'''
18	長崎	中 部	36	16.7	2.8	13.9	13.9	φ	φ
19	長崎	南東部	22	22.7	4.5	13.6	31.8	(1)・4	II'
20	長崎	北 部	22	0.0	13.6	9.1	22.7	(4)	I'
21	熊本	熊本市	47	4.3	0.0	0.0	38.3	4	I
22	熊本	北 部	34	5.9	8.8	2.9	38.2	4	I
23	熊本	中 部	16	6.3	6.3	6.3	37.5	4	I
24	熊本	南 部	21	0.0	0.0	0.0	47.6	4	I
25	大分	大分市	61	0.0	0.0	0.0	1.6	φ	φ
26	大分	中 部	41	0.0	0.0	0.0	4.9	φ	φ
27	大分	南 部	20	0.0	0.0	0.0	10.0	φ	φ
28	大分	北 部	24	0.0	0.0	0.0	0.0	φ	φ
29	大分	西 部	9	0.0	0.0	0.0	11.1	φ	φ
30	宮崎	宮崎市	26	0.0	0.0	0.0	11.5	φ	φ
31	宮崎	北 部	14	0.0	0.0	0.0	14.3	φ	φ
32	宮崎	南 部	9	0.0	0.0	0.0	22.2	(4)	I'
33	宮崎	西 部	13	0.0	0.0	0.0	23.1	(4)	I'
34	鹿児島	鹿児島市	82	1.2	0.0	0.0	7.3	φ	φ
35	鹿児島	薩摩南部	28	0.0	0.0	0.0	17.9	φ	φ
36	鹿児島	薩摩北部	23	0.0	0.0	0.0	26.1	(4)	I'
37	鹿児島	大隅北部	17	5.9	0.0	0.0	23.5	(4)	I'
38	鹿児島	大隅南部	19	0.0	0.0	0.0	10.5	φ	φ
平均 値				8.7	6.4	7.2	20.3		
標準 偏差				12.7	11.8	12.8	12.6		